

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：13401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24792542

研究課題名(和文)統合失調症患者を介護している親の介護負担感軽減のための看護支援プログラムの構築

研究課題名(英文) Construction of burden relief nursing support program for the parents of people with schizophrenia

研究代表者

川口 めぐみ (Kawaguchi, Megumi)

福井大学・医学部・講師

研究者番号：40554556

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、統合失調症者を自宅で介護している親の介護負担感軽減のための看護支援を検討することである。そのため、まず、親の介護負担の実態を明らかにする面接調査を実施した。次に親の介護負担感に関連する要因を明らかにする質問紙調査を実施した。これらの結果を踏まえて、研究代表者が看護支援内容を検討した。その後、精神科で働く看護師および医療ソーシャルワーカーを対象として研究代表者が検討した看護支援内容についてフォーカス・グループ・インタビューを実施し、看護支援内容について意見をもらい、修正した。

研究成果の概要(英文)： This study, we examined the nursing support in order to reduce the care burden of the parent of people with schizophrenia. First of all, we were carried out interviews to clarify the actual situation of the care burden of the parent. Next, we conducted a questionnaire survey of order to clarify the factors related to the care burden of the parent. From two of the results, we conducted a focus group interviews intended for mental health nurses and medical social worker. Our results suggest that parents' coping skills and patients' social life skills should be assessed and promoted before discharge in order to decrease parents' care burden .

研究分野：精神看護学

キーワード：統合失調症患者 親 介護負担感

1. 研究開始当初の背景

統合失調症は、好発年齢が 10 代後半から 20 代前半であり、慢性的な経過を辿ることから長期に介護を必要とする¹⁾。また、地域で生活する精神障害者の 65%以上が退院後に親と同居し、介護を受けている²⁾。しかし、患者の地域での生活を支える家族は、患者の介護により、自責感、無力感、孤立無援感、重荷感等の介護による負担を感じている³⁾。家族は、患者との接触時間が増えることで、患者に対する「敵意」、「批判的」、「情緒的巻きこまれすぎ」の感情を生み⁴⁾、これらの感情表出は、生活上のストレスが原因で症状の悪化をきたす統合失調症者にとってストレス因となり患者の再発率を高めている⁵⁾。また、統合失調症者を介護する際に、患者が怒るようなことを言う、大声をだして患者を制止するなどの「威圧」、現在の介護状況を改善するエネルギーがないため、何か起こるのを待っているといった「あきらめ」という対処をしている親ほど、介護負担感が高いこと⁶⁾、日常生活上のケア⁷⁾の必要度が高い患者ほど家族の介護負担感が高いことが報告されている。また、患者の罹患期間が長いこと⁸⁾や入院回数が多いこと⁹⁾、親に対する支援の乏しさ⁷⁾も、介護負担感を高める要因であった。これらのことから、親に対する介護負担感を軽減するための看護援助は、患者の再発予防のために不可欠であるとされている⁶⁾。そのため、統合失調症者を介護している親の介護負担感を軽減するための支援体制の構築は急務である。

2. 研究の目的

- (1) 統合失調症者を自宅で介護している親の介護負担の実態と介護負担感に影響する要因を明らかにする。
- (2) 1 の結果から、統合失調症者の退院後の介護負担感を軽減するために、入院中から退院後を通して患者とその親に対する看護支援内容を検討する。
- (3) 1, 2 の結果から統合失調症者を自宅で介護している親の介護負担感を軽減するために、精神科看護師が患者ならびにその親に対して患者の入院中から退院後を通して行う看護支援プログラムを構築する。

3. 研究の方法

- (1) 統合失調症者の退院に伴い、患者の生活の場が病棟から自宅へと変化することで、家族が経験する介護負担の過程を明らかにすることを目的として、統合失調症者と同居して介護している主介護者 5 名を対象として面接調査を実施した。
調査内容は、対象者の年齢、性別、患者との続柄、患者の退院日、統合失調症罹患期間、現在までに家族が経験した介護負担の内容であった。
分析方法は、録音したインタビュー内容

から逐語録を作成し、逐語録から家族の介護負担と考えられる文章を文脈ごとに抽出してコード化、相互の相似性と相違性に従って、サブカテゴリー化、さらにカテゴリー化した。その後抽出されたカテゴリーを患者の生活の場の変化に沿って分類した。

- (2) 統合失調症者を自宅で介護している親の介護負担感に関連する要因を明らかにするため、統合失調症者を自宅で介護している親を対象に、無記名自記式質問紙調査を実施した。調査は、A 県内の精神科外来のある 8 病院、A 県精神保健福祉家族会連合会に依頼した。親の介護負担感、精神障害を持つ患者の家族を対象とした Reinhard ら¹⁰⁾の評価尺度の合計得点として求めた。分析方法は、親および子の属性と支援状況、親の介護状況、親の対処技能の下位尺度(情報・コミュニケーション・社会的関心・威圧・回避・あきらめ・社会的参加)ごとの合計得点、子の社会生活技能合計得点、子の治療状況を説明変数として、親の介護負担感に対する重回帰分析を行った。統計学的有意水準は $p < 0.05$ とした。
- (3) 質問紙調査の結果から、研究代表者が統合失調症者を同居して介護している親の介護負担感軽減のための看護支援内容を検討し、精神科で働く看護師 2 名、ソーシャルワーカー 2 名を対象にフォーカス・グループ・インタビューを実施し、看護支援内容について検討した。また、A 県精神保健福祉家族会連合会所属の統合失調症者の親 20 名を対象に結果の報告会を実施し、支援内容および親の希望する支援についてグループインタビューを実施した。

4. 研究成果

- (1) 研究開始年度は、前年度から実施していた面接調査の分析を行った。
家族の介護負担として、163 コード、24 のサブカテゴリー、10 のカテゴリーが抽出された。(はサブカテゴリーを示す。)
入院中の介護負担
)患者が統合失調症であることを再確認する
家族は、患者の入院治療に対して「やはり、普通に考えると、閉鎖病棟のような生活というのは。」と治療環境への困惑や「(病名を)知ってるんですけど、信じたくない。」と、患者が入院することで改めて患者が統合失調症であることを突きつけられる経験をしていた。
)医療者中心の治療
入院中の患者の家族支援について「(医療職から)家族(へ)の支援というんですかね、あればね。」と家族は医療者から支

援を望みながら 家族は支援の対象にならない 現状について語っていた。また、患者のデイケア導入までの関わりで、退院後に利用できる支援についての面談では「退院間際に一回、初めて会ったんですけど、うちの子とはまだ会ったこともないですって。そしてこれからどうしていくのかと思ったら、(デイケアに自分で)見学に行ってきたくださいってだけ。」と 不十分な退院支援 と感じていた。また、「先生は退院して大丈夫って、(中略)保険(入院期間の制限)もあるで長くおれんのやろうけど。まだあれ(症状)が残ってたわ。」と家族は回復していないと感じていても医療者は退院が可能と判断しているという 医療者と家族の回復に対する認識の違い を感じていた。

退院から現在までの介護負担

）患者の疾患を他者に知られる恐怖

退院後、家族が患者と地域での生活を続けるためには、「(統合失調症は)うちの恥だからって、みんな隠しておく。」と 患者の疾患を知られないように生活することや、「人に迷惑かかるとあかんでの。」と 他者に迷惑をかける心配 をしながら、今の生活を続けていくためには、患者の疾患を隠さなければならないという思いを持っていた。

）患者に束縛された生活

家族は退院した患者との生活は、「時間をかけて(病院に)くるのも大変なんです。」といった 自分の時間がとられる、「(患者は)精神的におかしくなっちゃうってことがあるんで、僕がついて色々と気を使ってやらないと。」といった 患者から目が離せない ため、物理的にも、心理的にも患者に束縛される生活であると語った。

）常に症状に対応しなければならない

患者が自宅で生活を始めたことで、家族は「病院にいれば看護師さんが見てくれてたけど、今が一番困ってる。(中略)赤ちゃんみたいに甘えたような感じになって、わがまま言って。」と 自己中心的な態度に困惑 することや、「初め(発症時)が暴れてひどかったで、またなるかって。」と 暴力におびえる こと、「気になりだしたら、徹底して掃除したり。」といった患者の こだわりへの理解に苦しむ 経験も語られた。また、「つい、しっかりしてよって(患者を)責めてばかりになって、後で自分のことばかりやったって(反省する)。」と 患者への対応を悔やむ ことを繰り返していた。

）見通しの立たない患者の生活

家族は、患者が退院してきたにもかかわ

らず、「退院してきても、まだなんもできん。」という状態であることで、家族の望む回復レベルに患者の状態が達しないことに対する 回復が見えない苛立ち や「これからどうやって自立していくんかって。」と 自立への不安、「家に帰るとあかんのやわ。すぐに悪くなる。ようなったり悪くなったり。」といった患者の 症状が安定しない ことから、先の見えない患者の生活について不安を抱えていた。

）嫌がる患者に医療を受けさせる

家族は、「調子が良ければ薬を(やめてしまう)。とにかく薬を飲ませなあかんってのがね。」と 服薬継続の困難さ や、「本人(患者)が薬を嫌だといって、病院も嫌がる。」といった 患者の治療拒否のように嫌がる患者に家族が治療を継続させなければいけないことに困難さを抱えていた。

入院中から現在までを通しての介護負担

）経済的な重荷

家族は、「辛かったのは、毎月のお金ですぬ。」と 入院による毎月の支払 や、「この子(患者)が居ると、いらん費用がかかる。病院の費用が。」と治療費を 無駄な出費 と捉え、経済的な重荷を訴えていた。

）家族としての責任

家族は、「親としてちゃんと普通の、そんな生活をさせてあげないって。」と家族であるがゆえに 患者の生活を支えなければならない ことや、「僕の目の黒いうちに(自分のことは自分でできるように)なってもらわんとあかん。」といった 家族としての責任 を感じていた。

）家族の関係悪化

家族は、「(父親は)そんなことをいっても無駄なのに、(患者を)頭ごなしに怒る。」といった 家族成員の意見の相違、「(義理の両親は)病気の理解がない。仕方なく連絡できなくなった。」と患者の発病により 家族の不和 といった、家族成員間の問題を抱えていた。

(2) 研究 2 年目からは、前年度の面接調査の結果を参考にして作成した質問紙を用いて、統合失調症者を同居して介護している親を対象に質問紙調査を実施した。研究計画段階では、入院中から退院 1 年の介護負担感の変化を明らかにするために、入院中、退院 3 か月後、退院 12 か月後の 3 時点で質問紙調査を実施する予定であったが、退院からの期間による親の介護負担感に有意差は認められなかった。そのため、退院後の統合失調症者を同居して介護している親を対象にして介護負担感に関連

する要因を分析した。その結果、親の介護負担感合計得点と親の対処技能の下位尺度「情報」、「威圧」、「回避」、「あきらめ」ならびに子の社会生活技能合計得点間にそれぞれ有意な負の相関が認められた。また、ステップワイズ法による重回帰分析では、親の対処技能の下位尺度である「あきらめ」と「回避」、子の社会生活技能合計得点が採択され、3要因の調整済みR²は、0.545であった。

(3) 質問紙調査の結果から、統合失調症者を自宅で介護している親の介護負担感軽減のためには、親の子への対処行動の指導、および子の生活技能を高めるための支援が必要であることが示唆された。そのため、具体的な看護支援内容としては、すでに先行研究においても効果の認められている心理教育やSSTを統合失調症者の発症間もないころから患者と親へ実施し、疾患教育やコミュニケーションを学ぶ機会を設けることの重要性が再確認された。

また、統合失調症者の親を対象としたグループインタビューの結果から、心理教育やSSTの重要性に加えて、医療機関において親がカウンセリングを受けることのできる機会を設けること、統合失調症者の入院中から社会資源導入に向けた支援のさらなる充実が必要であると考えられた。

<引用文献>

武井麻子,江口重幸,末安民生他:系統看護学講座専門分野 精神看護学1,160-171,医学書院,東京都,2013

厚生労働省:今後の精神保健医療福祉のあり方に関する検討会資料-精神病床の利用状況に関する調査-,2008

岩崎弥生:精神病患者の家族の情動的負担と対処方法,千葉大学看護学部紀要,20:29-40,1998

伊藤順一郎,大島巖,坂野純子他:EE(expressed emotion)と再発,脳と精神の医学,3(2):163-173,1992

大島巖,伊藤順一郎,柳橋雅彦他:精神分裂病者を支える家族の生活機能と

EE(Expressed Emotion)の関連,精神神経学雑誌,96(7):493-512,1994

半澤節子,田中悟郎,稲富宏之他:統合失調症患者の母親の介護負担感に関連する要因-患者の性別による比較-,精神障害とリハビリテーション,13(1):79-87,2009

半澤節子,田中悟郎,後藤雅博他:統合失調症患者の母親の介護負担感に関連する要因-家族内外の支援状況と家族機能の関連-,日社精医誌,16:263-274,2008

Gopinath PS, Chaturvedi SK : Distressing behavior of schizophrenics at home, Acta Psychiatr Scand, 86 :

185-188,1992

酒井佳永,金吉晴,秋山剛他:精神分裂病者の家族の負担に関する研究,精神医学,44(10):1087-1094,2002

Susan C.Reinhard,Gayle D. Gubman, Allan V.Horwitz ,et al. : Burden assessment scale for families of the seriously mentally ill,Evaluation and Program Planning,17(3):261-269,1994

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 1 件)

川口 めぐみ,長谷川 美香
第43回日本看護学会論文集 地域看護 -, 査読有, No.1, 2013, 51-54

[学会発表](計 3 件)

Megumi Kawaguchi, Mika Hasegawa, Yoji Deguchi
Factors related to caregiver burdens for parents of schizophrenic patients in Japanese provincial cities, 35th International Association for Human Caring Conference, 2014

川口 めぐみ,長谷川 美香
統合失調症患者の主介護者の介護負担
心理教育・家族教室ネットワーク,2014年

川口 めぐみ,長谷川 美香
統合失調症者の生活の場の変化によって
家族が経験する介護負担,日本看護学会 -
地域看護 -, 2012年

6. 研究組織

(1)研究代表者

川口 めぐみ (KAWAGUCHI, Megumi)

福井大学・医学部・講師

研究者番号:40554556